

## メッセージアウトライン テサロニケ人への手紙 第一4:9~12 「互いに愛し合うこと」

[9]「兄弟愛については、何も書き送る必要がありません。あなたがたこそ、互いに愛し合うことを神から教えられた人たちだからです」

「兄弟愛」(フィデルミア)…キリスト者が主にある兄弟として互いに愛し合う親しい愛。それは神が、神にそむき、罪と死と滅びの闇の中にあつた人間を愛される愛に起源を持つ。→ヨハネ3:16

テサロニケ教会の人々はこの兄弟愛の実践について模範的な教会であつた。彼らはそれを神から教えられた。このことばの意味は、パウロたちが彼らに福音を伝え、そこに聖霊の豊かな働きがあり(1:5~6)、彼らはそれを神のことばとして信じ受け入れ(2:13)、そこで互いに愛し合うことも教えられたという意味であろう。

[10]「実にマケドニヤ全土のすべての兄弟たちに対して、あなたがたはそれを実行しています。しかし、兄弟たち。あなたがたにお勧めします。どうか、さらにますますそうであってください」

「マケドニヤ全土のすべての兄弟たち」…マケドニヤの教会はピリピ、テサロニケ、ベレヤしか知られていないが、さらに他にも教会が立てられていたのかもしれない。→使徒16~17章

テサロニケのクリスチャンたちは接触可能なすべての兄弟たちに愛を示した。そのような彼らに対してパウロは「どうか、さらにますますそうであってください」と願う。地上では兄弟愛の実践において、これで完全ということはない。それゆえ、ますます兄弟愛の実践に励んでくださいと勧めるのである。

[11]「また、私たちが命じたように、落ち着いた生活をするを志し、自分の仕事に身を入れ、自分の手で働きなさい」

ここでは兄弟愛に続き、日常生活についての戒めが語られる。主イエス・キリストの再臨を待ち望む者が現実になすべきかという課題である。テサロニケ教会の人々はキリスト再臨の教え(2:19、3:13)を聞いて浮足立った生き方をしていた人々がいたようである。詳しくは4:13節以下で語られるが、ここではそれに関して現実的な対処が教えられる。

「落ち着いた生活をするを志し」…キリストがいつか来られて、私たちが知っている人生は終わりになるのだという事実は仕事を投げ出す理由にならない。むしろ、あらゆることをもっと一生懸命に、もっと忠実に果たす理由となる。→マタイ25:21,23

「自分の仕事に身を入れ、自分の手で働く」…これはあらゆる種類の働きに共通する基本的な生活の姿勢である。

[12]「外の人々に対してもりっぱにふるまうことができ、また乏しいことがないようにするためです」

10~11節で教えられたように生きるならば外の人々(クリスチャンでない人々)に

対してりっぱにふるまうことができ、よい証しとなる。クリスチャンは人の顔色をうかがうのではなく、神ご自身のみこころを第一にして生きることが必要であるが、それと同時に自分の生き方が周囲の人々にどのような影響を与えるかを常に考慮する責任も与えられている。神を第一とするあまり、家庭や隣人もかえりみず、社会的責任も果たさないということがあってはならない。

さらに仕事に身を入れ、一生懸命に働くことは、貧しくならないためでもある。回りの人にあわれまれ、援助してもらわなければならないような状況に陥らないためにも、仕事に身を入れて励まなければならない。→ローマ12:11、Ⅱテサロニケ3:10~12

私たちクリスチャンは世の人々のつまずきになるのではなく、兄弟愛をもって互いに愛し合い、落ち着いて自分の仕事に身を入れて働き、神の栄光を現す者として生きることが大切である。